

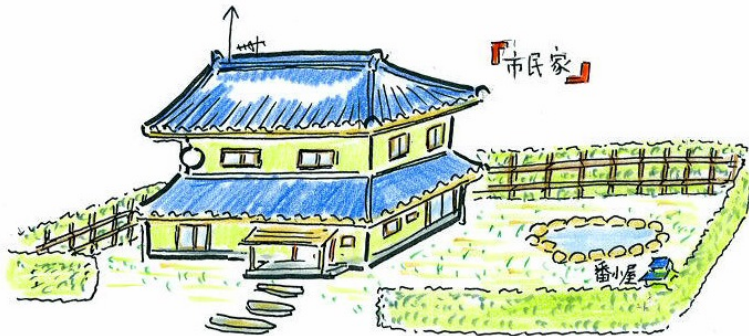
◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆

# これまでのあらすじ

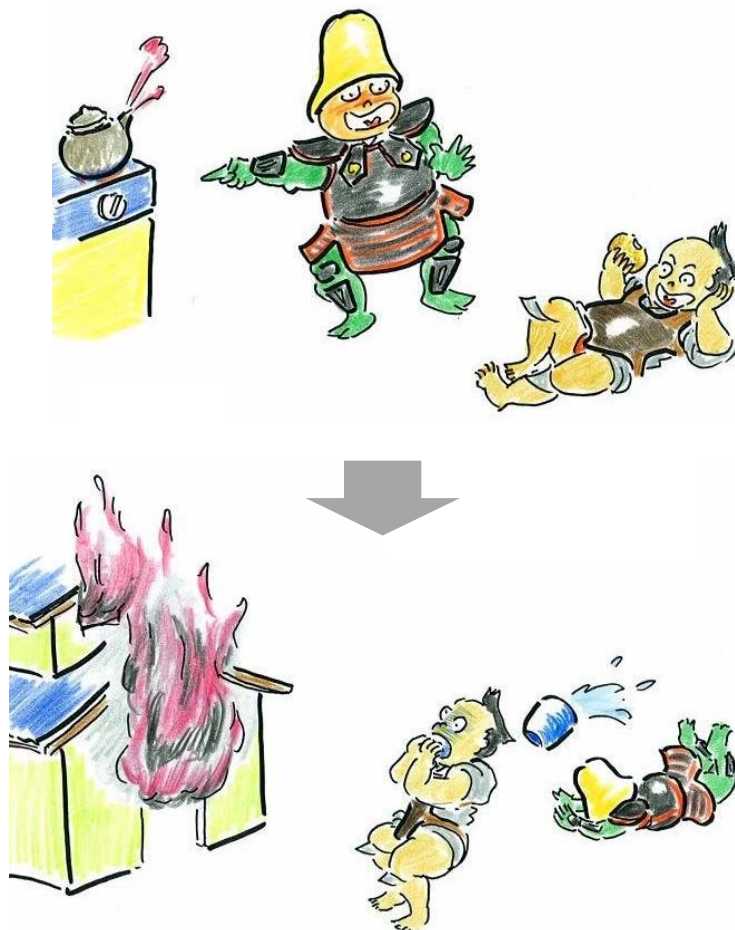
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の中間<sup>ちゅうげん</sup> ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん<sup>えん</sup>には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく  
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

**火災予防奮闘記** をどうぞご覧ください。

# 支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.41

---

## 前号のあらすじ

---

晩春の兼六園、梅園で酒に酔ったご助を残し、蕨とノブキ採りに夢中となった拙者（支援くん）は広大な栄螺山の山中で道に迷う。切り株にへたりこんだ拙者の背後が『ガサガサガサ・・・』とざわつき、暗い藪の中から『ぬうう』と突き出したのは月の輪熊だった。

全速力で逃げる拙者を、「ま、待って下せえー」と追いかけてくる月の輪熊。飛び掛かって来た熊ともども気を失った拙者が目を覚ますと、熊の口の中には見慣れたご助の馬鹿面が・・・

---

「やややっ、ご、ご助！ ご助が熊に食われておる！！ 助けねば、こら熊公、ご助を出せ！ 吐き出さぬか！」とご助の危機に熊への恐怖も忘れ、拙者は叫びながら熊の頭を 腹を 背中を叩き、殴り、蹴り上げたのじゃ。



そうしたら熊公が

「いててっ、何しがるんでえ、痛えじゃねえですかい！」と聞き覚えのある  
声で叫んだのじゃった。

「・・・？ご、ご助・・・大丈夫か？生きておるのか？」と聞くと

「大丈夫も何もあったもんかい！先刻は旦那様を探しに山ん中に入ったあっし  
を置いて先に逃げるし、今は今で気を失ったあっしを殴る蹴るの乱暴狼藉だ。

旦那様とて許しやせんぜ！」と熊公が、いや、熊公の口の中で ご助が怒鳴るの  
じゃった。





その不気味な姿に

「お、おのれは・・・食われたんではないんかい？」と恐る恐る尋ねると、

「はあ？食われた？何であっしが食われなきゃならねえんてい！ははん、旦那様はあっしが熊にでも食われりゃ良いと思ひ、置いて逃げたんだ。てやんでえ、夜になってもお帰りにならねえからシンペエ（心配）してたら栄螺山の方から『ご助えー、助けてくれえー』と素っ頓狂な声がるじゃねえですかい。それで来て見りゃこの仕打ちだ！」と熊公が、いや熊公の中のご助が一気にまくし立てたのじゃった。

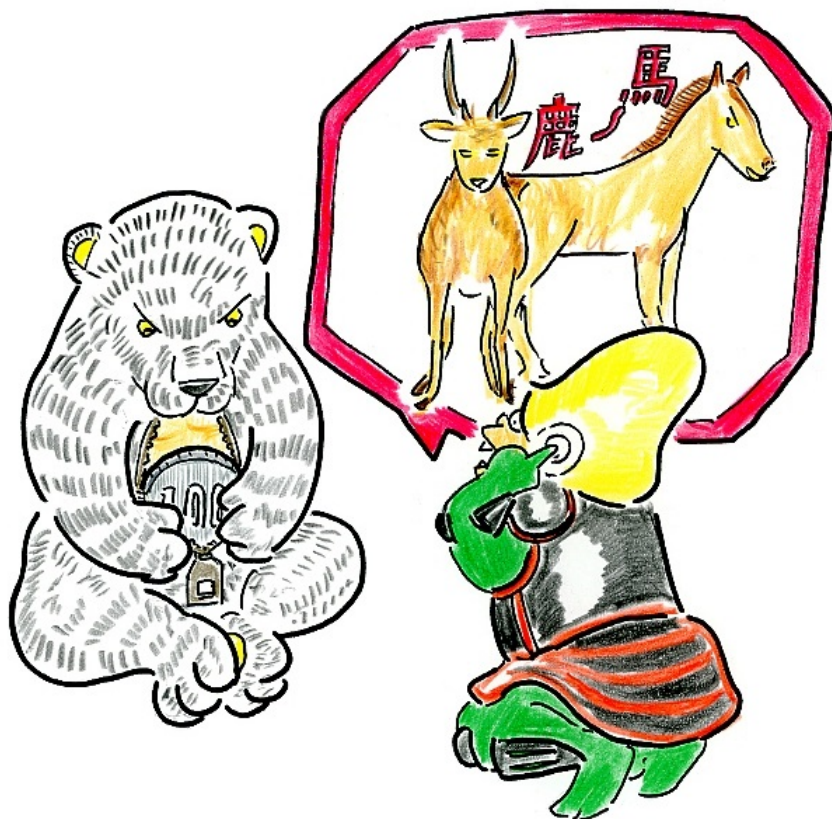
「面目ない。つい山菜取りに夢中になっての。じゃが、どうしておのれは熊に食われて生きておるのじゃ？」との問いかけに

「さっきから一体何なんです？・・・ははん、この格好ですかい？こりゃ花見客の忘れ物の小銭入れでさ。ほれ、ここがチャックになってやしてね。なにね、夜の栄螺山は以前熊が出たことがありますでやしよ？物騒ですからねえ、熊に出くわしても大丈夫なようにこの格好でさ。どうです熊に見えやすでしよ？」

と得意げにしゃべるご助に

「お、おのれは馬鹿か？」

「ば、馬鹿とは何でえ馬鹿とは！」



「馬鹿だから馬鹿って言ったのじゃ。山の中で熊に・・・もう良い。帰るぞ。

帰り道はどっちじゃ？」

「ちっ、都合が悪くなったらこれだ！・・・ええと・・・」と言いながら周囲を眺めるご助の顔が徐々に翳り始めたのじゃった。

「・・・どうした？忘れたのか？」

「ええ・・・っと、確かあ・・・こっち、いや、こっちですじゃ。」と、ご助の指す方角は定まらなかった。

「忘れおったな、愚か者めが。」

「誰が愚か者でえ、大体、旦那様が最初に迷ったのがいけねえんじゃねえですかい！」

「むむむ・・・それは・・・済まぬ。」と拙者が素直に謝ると

「な、なんで素直に謝っちゃうかなあ、ちょ、調子狂うじゃねえですかい！」

あっしの為に山菜採ってらっしゃんでしょ？」とご助

「お？わかるのかい？」



「わかりまさあ。 あっしの好きな蕨にノブキだ。 それに旦那様は山菜が苦手じゃねえですかい。それを両手に一杯握りしめて・・・本当に余計な真似しねえで・・・いえ、有難うござえやす。」

「おっ、おのれも今日はやけに素直じゃないか。」

「そ、そりゃたまにはねえ・・・それに、こんな夜更けの山の中で張り合ってもしょうがねえでやしょうが。」

「その通りじゃ。兎に角帰り道を探さねばな。」

「あっ、旦那様あれを」と、ご助が指さす方を見ると、栄螺山のはるか麓に赤く小さく光る場所が・・・



「お、あそこまで行けば何とかかなりそうだな。よく見つけたな褒めて遣わす。」

「へへへ、たまにはあっしも役にたちますでやしよ？」

「そうじゃな。まあ、たまにはの、はははは」と主従そろって機嫌よく山を下り始めたのじゃった。



やがて、目指した赤い点が徐々に大きくなり始めるようになると、なるほど、昼間拙者がたどった道へと出たのじゃった。

「おお、ご助、見よ、もう近いぞ。」と声を掛けたのじゃがご助の返事はなく

「どうしたご助？」と振り返ると、その姿も忽然と消えておった。



「変なやっちゃん。まあここまで来れば道に迷うこともあるまい。」と拙者はさらに目印を目指したのじゃった。

「どおれ、この松の大木を過ぎれば・・・過ぎれば・・・あああっ」と、そこで拙者は声を失ったのじゃった。

なんと赤い照明だと思っていたのは、枯葉が燃える炎の明かりじゃった。

「な、なんじゃこれは？何で燃えているのじゃ？」と叫びながら見れば、炎の中で熊が、いや、熊のような生き物が、炎を踏みしだいて消しておるではないか。

「ご、ご助？ あれれ？ ここは確かご助が泥酔して寝たばこをしておった場所ではないか！ご助の馬鹿め、拙者に悪事を悟られまいと先回りしおったな！！たわけが！」と更に叫びながら拙者は炎の中へと飛び込み、炎を踏み始めたのじゃ。



活動すること十数分、ようやく下火となったのを確かめた拙者は、振り向きざま  
「この大馬鹿者めが！寝たばこするなとあれほど言いつけておいたものを、  
まだ懲りぬのか！」と熊をしかりつけたのじゃ。  
「ググウ？」と頭をかしげる熊・・・

「ええい、いつまで被り物をしておる、さっさと脱がんか！」と、熊に近寄った拙者はその大きさに肝を冷やしたのじゃった。

「い、いやご助、こ、これは・・・」と、突然大きく成ったご助を前に言葉を失い立ち尽くす拙者の背後から

「だ、旦那！ 旦那様、そいつぁ本物ですぜ！！」 と小さく声を掛けるものがおった。

(令和6年5月号につづく)